



# 伝奇ブラン①

---

摩陀羅の牢

---

奇怪伯爵

---

ほとんどが、闇に近い。

部屋に通されたとき、闇の空間に放り出されたような感覚に襲われた。

宇宙すら感じる空間に、浮遊している。

重力すら、感じられない。

それが、次第に眩暈を誘ってくる。

幽かに、蠟燭の炎が揺れている。

それが消えれば、その場は漆黒の闇に飲み込まれるだろう。

小さな炎に照らし出される空間。

それもまた、異様な空気を帯びている。

金色の法具。

経典。

宗教的なものの他に、用途の不明な金属器や獣の角などもあった。

一見それは、16～18世紀に盛んだったヨーロッパのヴンダーカンマーを思わせた。

欧州の貴族は、美術品や貴重品と共に怪奇なものや珍奇なものを蒐集し、私設博物館として展示したのである。

しかし、この空間は、貴族の道楽とはほど遠い何かを纏っていた。

もっと、生命に関する切迫した何かが、闇の中に隠されている気がしてならない。

鳴沢丈一郎は、隣に立つ久隅準の表情を窺った。

とても、話ができる状況ではない。

その場の雰囲気、全てを押しつぶしている。

久隅は、涼しい顔をして、顔を前に向けていた。

鳴沢も、どちらかといえば、肝の据わった男である。

高校、大学とその巨軀を活かし、空手に没頭した。

大会でも上位に食い込むほどの、実力者であった。

そして、久隅もまた、同様である。

学校こそ違ったが、二人は試合を行ったこともあった。

実力が拮抗していたせいだろうか。ライバルとも友人ともつかない、奇妙な関係が成立していた。

大学を卒業して、しばらくは互いに音信普通だった。

ところが、1か月ほど前に、久隅から鳴沢に連絡があった。

最近、どうしている？

一度就職したのだが、ソリがあわないんで辞めちまった。

それなら、俺の仕事を手伝わないか？

鳴沢は、久隅の誘いに乗った。

他に、やることもなかったからだ。

香が、焚かれた。

煙に乗って、不可思議な匂いが漂う。

鳴沢の前方で、闇が動いた。

鳴沢が目を凝らす。

その動きを咎めるかのように、声が響いた。

『新入りかの？』

『ええ』

久隅の声に、若干の緊張が混じっている。

『今日は、大事な日であるぞ』

『彼なら、身元は確かです。昔からの知り合いで。実力も私が保証します』

『ふん。新人には、キツイかも知れぬぞ……』

しわがれた声から判断すれば、それは老婆のものだった。

蠟燭の炎が追加され、部屋内の輪郭が明瞭となった。

鳴沢の前方の奥に、祭壇らしきものがある。

中央に、奇怪な象が鎮座していた。

およそ、仏像とは呼べない代物であった。

ここまで面妖な神など、見たことがない。

全体的な形は、人に近い。

しかし、阿修羅像のように腕が6本。

身長に対して、腕の比率が随分と長い。

言ってみれば、人の体に蜘蛛の足がついているようだった。

中央には、これも蜘蛛を似せたような顔。

人の頭部とは、全く違う。

それが乗った胴は、痩せた少年のように華奢であった。

このような像が、存在するものなのか。

鳴沢は、目を疑った。

塑像として、完成度が低いものではない。

モチーフが仏であれば、それなりに高い評価を得られたであろう技術が集約されている。

しかしこの像は、自らそれを望んではいない。

そしてまた、作者も然り。  
闇の中に伝わり、闇の用途を備えた像。  
始めから、目的は決まっていたのである。  
その用途とは、如何なるものか。

儀式の始まりを察知したかのように、蠟燭の炎が強まった。  
その炎は、新たなものを照らし出す。  
丁度、蜘蛛の象の真下に、二組の敷布団がある。  
右には、老いた男性。  
左に、若い女性。  
女性の腹は、瘤のように膨れており、臨月が近いことを物語っていた。  
二人とも、微動だにしない。  
そこへ、老婆の言葉が押し出されるかのように流れた。

梵、雑、念、燐、腑、臍、髓、検  
脆真命、離真嶽、地門塔

経のようであり、経ではない。  
鳴沢は、この言葉に底知れぬ不安を抱いた。  
この世に存在してはいけない言葉。  
漠然とだが、そう感じた。  
もし、この言葉があの子の言葉であるのなら、それは二つの世界を結ぶ接点と成り得るかもしれない。  
それが、老婆の目的だとしたら……。

老婆の言葉に導かれるかのように、不穏な気が呼び起こされた。  
それは、横たわった老人の口から発せられた。  
獣のような唸りが、老人の喉の奥から発せられていた。  
老人の体は波打ち、激しい痙攣を見せる。  
老女の言葉は、さらに続く。  
それに呼応するかの如く、老人の口は叫びを発し続けた。  
やがて、老人の口は卵を飲み込む蛇の如く開かれた。  
顎が、外れているのかもしれない。  
その奥から、黒く細い針のようなものが見え隠れしている。  
老女は、さらに語気を強めた。  
誘導されるように、出現する物体があった。  
老人の喉の奥から出てきたものを、蜘蛛の足と理解した人間がいたかどうか。

それがゆっくりと、一本。

また、一本。

老人は、白眼を剥いて、既に意識がない。

それでなければ、凄まじい苦痛が彼を襲っているはずである。

こみあげてくる嘔吐感を必死に制しながら、鳴沢の視線は老人に注がれた。

孵化。

おそらく、間違いないだろう。

老人の身体内で育っていた蜘蛛が、今この場に出現しようとしている。

大量の粘液を伴ない、6本の長い足が宙を泳いでいる。

ミリッという、嫌な音が断続的に響いた。

老人の顔の皮膚は裂け、血が噴き出した。

いよいよ、あの世のものが、誕生する。

鳴沢は、その生物らしき正体を正確に理解していたわけではない。

しかし、肌で邪悪なものと感じ取った。

このまま、見ていて良いのか？

これを誕生させて、良いのだろうか？

老人の、断末魔の悲鳴が響いた。

それと同時に、奇怪な蜘蛛はその全容を現していた。

魚の腐ったような臭気が、あたりを漂う。

老女は、微かな笑い声をあげていた。

蜘蛛は、しばらくの間、脚をゆっくりと動かす仕草を繰り返した。

組織が凝固するのを待っているらしい。

黒くて細い脚の周囲には、微細な毛が生えている。

これほど醜い存在が、老人の体の中に眠っていたのか。

鳴沢は、思わず身ぶるいした。

老女の言葉は、すでに止んでいる。

彼女にとっても、この光景は初めてらしい。

自分の行為の結果を、素直に喜んでいるようであった。

そこへ、一人の女性が進み出た。

闇の中から、突如として出現したように見えたが、部屋の隅に居たのだろう。

しなやかな身体つきが、豹を思わせた。

『見事ですわ』

『沙希絵かえ。ついに成功したわえ。お前のいうとおり、寄代が良かったのかもしれん。見よ、奴は次の行動に移る……』

沙希絵と呼ばれた女の眼が、鳴沢を捉えたかのようにだった。

しかし、それは鳴沢の隣にいる久隅に向けられたものだった。

『おおっ……』

老婆の感嘆が、洩れる。

蜘蛛は、ゆっくりと移動を始めた。

その先には、若い女が横たわっている。

蜘蛛の脚先は、女の顔部分に近づいた。

そしてゆっくり、薄い唇をめくる。

もう一つの脚が上歯を、もう一つの脚が下歯をこじ開けた。

若い女は、麻酔で眠らされているのか、微動だにしない。

鳴沢は、理解した。

あの蜘蛛の化け物は、再びその身を人間の体内に隠そうとしている。

老人から若い女へ。

それが、何を意味するのかは分らない。

しかし、自分の感情は、否定している。

腹の底が熱くなり、怒りが芽生えた。

久隅は、何故、俺をこんなことに巻き込んだのか？

怒りの矛先は、久隅にも向いた。

非難の視線を久隅に投げた瞬間、鳴沢は凍りついた。

久隅は、銃を構えていた。

銃口は、蜘蛛を向いているようだった。

老女は、その気配を感じたのか、後ろを振り返った。

『鳴沢よ、何をしておる……』

冷たい声が、響く。

その音に、凄まじい殺気が込められている。

久隅は、答えない。

『我らの主を、撃とうというのか？』

老女の唇が、歪んでいる。

明らかにそれは、笑みを意味していた。

久隅の額に、汗が湧いた。

予想外の反応に、狼狽を隠すことができない。

『本気だぜ……』

老女を見据えながら、久隅が口を開いた。

『無駄なことを……』

『無駄？どうみても、俺に分がある』

『お主は、我らの怖さを知らん。うまく潜り込んだつもりだろうが、裏切りなど想定の外

困よ……』

『なにっ？』

『既に、手は打ってある』

がっ。

短い呻き声を上げ、久隅は翻筋斗をうって倒れた。

『鬼餓羅……。いつの間に？』

沙希絵と呼ばれた女から、冷たく発せられた声が響く。

『抜かりはないわ』

老女は、笑い声を上げた。

『久隅よ、声も出せない痛みであろう。貴様の中に仕込んだ鬼餓羅を孵化させたからな。生きて  
まま、内臓を喰われるが良い』

銃声。

一発。

そして、二発。

どこかで、悲鳴が上がった。

鳴沢の目に、老女が倒れる姿が映った。

そして、さらに一発。

この世のものでない悲鳴があがり、蠟燭の炎は全て消失した。

しばらくの間、何かの移動する音が聞こえていたが、それもやがて消えた。

真の闇が、空間に鎮座することとなった。

人の気配が完全に消えてから、鳴沢はライターの火をつけた。

壁に沿って移動し、ようやく電気のスイッチをつける。

やけに広い和室が照らし出され、畳の上に倒れている久隅の姿が目飛び込んできた。

『久隅！』

鳴沢が、久隅を抱き起こす。

『ざまあねえな……。とんでもねえ奴等だ。こんなものまで、仕込んでいようとは……』

久隅は苦痛に呻きながら、自分の腹に手を伸ばした。

大量の血が、シャツにしみ込んでいる。

久隅の指は傷口をまさぐり、何かを掴みだした。

ミミズのような触手が姿を現し、その先に人の親指大の胴体が引き出された。

『鬼餓羅だとよ……』

グロテスクな生物を見て、久隅が苦笑した。

『いったい、どうなっているんだ』

『これは、寄生虫みたいなもんだ。奴等、とんでもねえ化け物ばかり使いやがる』

『まさかお前、自分で撃ったのか？』

『ああ、寄生されたら、お終いだ。婆あが言っていたとおり、内臓を食い荒らしちまう。こうするより、方法がなかったのさ』

『お前、いったい何に巻き込まれたんだ？』

『それより、婆あの死体はあるか？』

鳴沢は、視線を移した。

祭壇があり、その下に2組の敷布団。

先ほど暗闇で見た光景と同じだ。

老男の無残な死体が転がっているが、他には何もなかった。

『いや、ない』

『なに？』

『老女も、若い女も皆消えてしまっている』

『摩陀羅もか？』

『摩陀羅？あの蜘蛛か？どこにも、いないぞ。足が一本、落ちているがな』

『いいか、鳴沢。よく聞いてくれ。俺は、もうもたない。最後に頼みがある』

息も絶え絶えに、久隅は力を振り絞った。

『妹を……。妹を助けてほしい。お前しか、頼れる奴がないんだ……』

『頼む……』

久隅の目から、涙が流れた。

『これは、俺の家の鍵だ。そこに行けば分かる。連中は、恐ろしい奴らだ。常識にとらわれるな。そして、必ず妹を助けてやってくれ』

鳴沢は、静かに頷く。

『こんなことに巻き込まれて、本当にすまん……』

鳴沢の腕の中で、久隅は息を引き取った。

苦痛の中でみせた僅かな笑み。

鳴沢が久隅の依頼を受けたことによる安堵感だったのだろう。

鳴沢は、静かに久隅の顔を閉じてやった。